Ⅰ．巻頭言

農林工学系長　小 池 正 之

農林工学系年報は16号を出版し、さて次年度の発刊はどうしたものかと思案中である。何故なら、本学系がこれまで培ってきた専門性の蓄積からなる学的実体は斯界において極めて貴重であり、その蓄積した学術面でのノウハウを台木として、現在論議中のいわゆる研究科主導新体制に顕在化している新たな専門性の括りを接ぎ木していく作業との関連の不透明さが感じられるがゆえに、思案中と言った訳である。この新体制が名実ともに形をなして動き始める時点では、学系は最早その存在意義を失うことになるかもしれない。それまでは学系と専攻との組織間の不断の調整作業が続くことになると思われる。この調整作業は極力短期間で終えるように、構成員の努力が俟たれるところである。

現在は、我われの専門分野において、あらゆる面から大きな転換期にあると思われる。多分、後にこの経緯を振り返ってみると、教育研究面で様々な考えが生まれては消え、既存の組織を変革する際にきしみ出るエネルギーに振り回されている我われの姿が映し出されることになるであろう。変革というそれ自体は望ましいことと思われるが、昨今の学系内外において起こっている出来事を見聞きするにつれ、やりきれない思いにとらわれることも多い。

とくに我が権利ばかりを主張し、「利他の心」に欠けた自己中心主義がはびこっているように思えてならない。最低限の規則さえ守っていれば何をしても許されるというものではない。変動期のさなかにあるからこそ、人間として本来矜持すべき倫理観や行動規範を忘れてはならないのである。

話を年報の行く末に戻そう。この年報は、多分、専攻の年報発行が具体化した段階で刊行中止となるであろう。しかしその精神は接ぎ木の常であるように、彩りに満ちたたくさんの接ぎ木が生き生きと茂り、明るい未来の大樹になっていくように継承されるであろうし、またそうなることを信じて疑わない。

平成16年度は、学系構成員が国内外においてさまざまな形の教育研究活動を展開され、その成果は学内外で高く評価された。具体的な事例は、本号の各構成員の業績欄において詳しく記述されているので、ご覧いただきたい。個々の構成員の関心は多様であり、その研究は特許、起業、国際連携事業等への展開に結びつく場合があるなど、その多様化傾向は今後一層促進されることになるものと考えられる。その際、専門性の深化を併った多面的な研究展開を行うことの必要性が強調されるであろう。

上述の組織改編が、我われの専門性の継承と発展に寄与するとの視座を堅持しつつ、構成員が日々の業務に楽しく取り組んでいただくことを祈念しながら擱筆と致します。